

6 ^{きゅうしゅうだいがく}九州大学・^{ごこうでん}御供田遺跡（6次調査）

所在地 春日市春日公園6丁目2番1の一部

調査面積 293㎡

調査期間 2014年1月20日～3月21日

九州大学・御供田遺跡は春日市東南部から大野城市にかけて広がる弥生時代～歴史時代にかけての遺跡である。春日市文化財課では、過去に5回の調査を行ったが、何れも北部の調査であった。今回の調査地は遺跡の南部で、大野城市との市境にあたり、開発対象地の内の春日市側を春日市教育委員会が、大野城市側を

大野城市教育委員会が行った。事前調査では、弥生時代前期の貯蔵穴と考えられる大形の土坑を確認していた。今回の調査は自衛隊の施設建設に伴う緊急発掘調査である。

遺構・遺物

前述したように6次調査地は、5次調査までとは異なり遺跡の南部で行なった。当地は丘陵の西側斜面であり、北側は九州大学筑紫キャンパスと接する。戦後以前の土取りであろうか、丘陵はところどころ削られており、改変を受けている。

重機を使用し、丘陵の斜面の表土を除去すると花崗岩風化土壌の地山に達し、そこに土坑5基、横穴墓1基、土壙墓1基、溝1条、ピットを検出した。以



1. 調査地の位置 (1/5000)



2. 調査区全景（西から）

下では、主なものについて述べる。なお、遺構検出面の標高は41 m前後である。

土坑は5基共に小片だが弥生時代前期の土器が出土した。このうち3～5号土坑は平面形の直径が2 mを超えるようなものである。3・4号土坑の上部は削平を受けており浅くなっているが、周辺の地形や5号土坑から考えて本来の深さは2 m以上であろう。規模や形状から弥生時代前期の貯蔵穴と言えよう。横穴墓は斜面下方に立坑状の前庭部を掘り、斜面上方側へ羨道と玄室を横穴状に掘るものである。玄室の天井は崩落しており、検出時は2基の別の土坑の切り合いに見えた。羨門は2枚の石で閉塞しており、羨道と玄室床面には赤色顔料が施されていた。なお、壁面は崩落のため残りが悪いが、玄室の全面には赤色顔料が塗布されていたと思われる。玄室床面には、鉄刀1、鉄鏃5程度、曲刃鎌1が副葬されており、土器の副葬はない。溝状遺構はこの横穴墓の上方に弧を描くように検出した。このため横穴墓との関連が想定でき、当横穴墓が墳丘と周溝を有していた可能性がある。なお、溝検出時に内面がナデ消された須恵器甕の破片が出土した。横穴墓が単独で存在すること、副葬品に土器がないこと、玄室に赤色顔料を施すこと、墳丘を持つ可能性があることなどから古式の横穴墓の可能性があり、上述した須恵器片の時期とも矛盾はない。また、近接する土壙墓は遺物が出土していないために、形状からの判断ではあるが、横穴墓に付属する小児用の墳墓の可能性があるのでなかろうか。

小 結

6次調査では貯蔵穴や横穴墓を調査することができた。特に横穴墓については、恐らく狭義の福岡平野において、状態の良い横穴墓を調査した初の例ではなかろうか。丘陵頂部の大野城市側の調査では弥生時代の貯蔵穴と共に、古墳時代の墳墓も確認されており、横穴墓との関係が興味深い。

(井上)



3. 3・4号土坑（南東から）



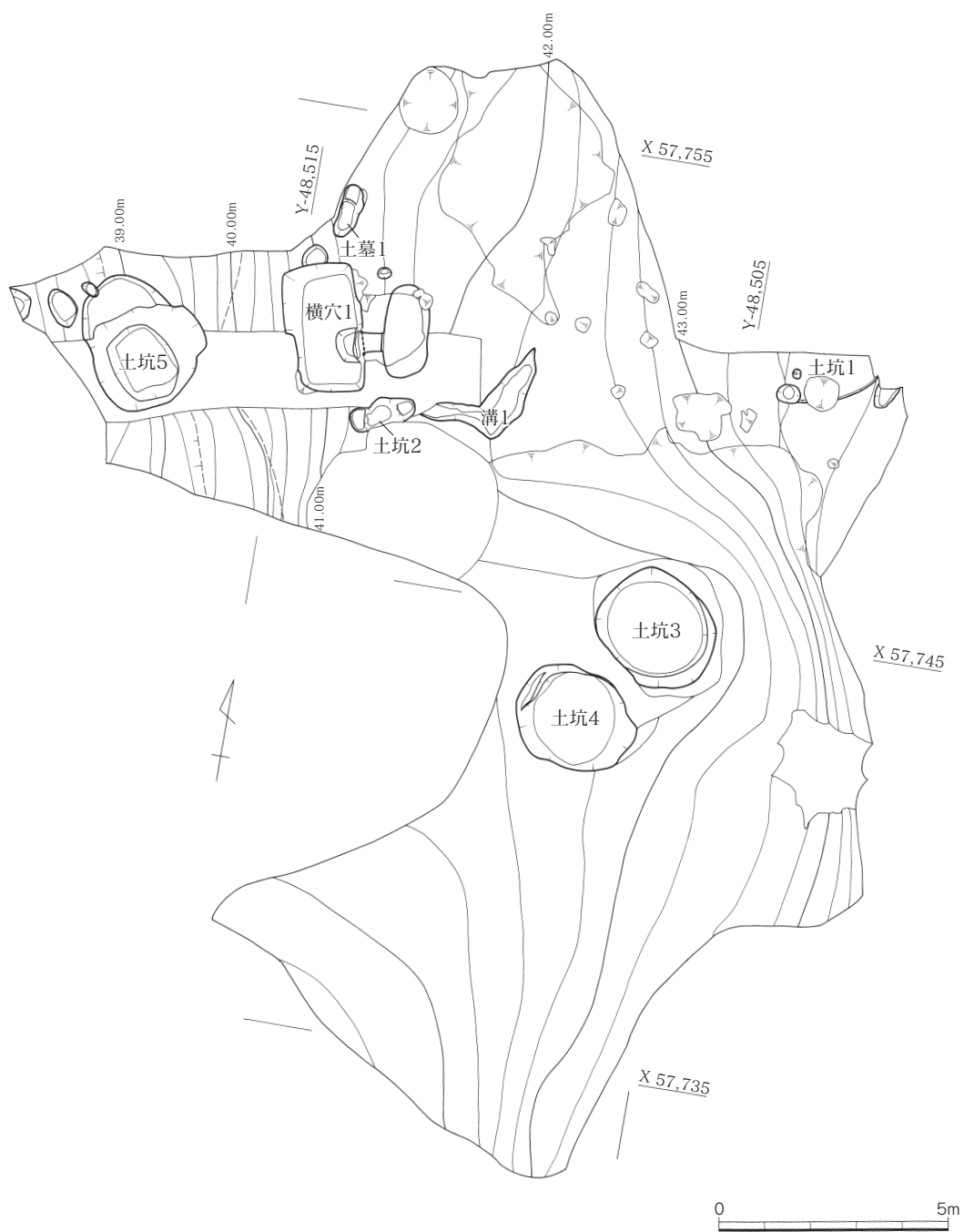
4. 1号横穴墓（西から）



5. 1号横穴墓閉塞除去状況（西から）



6. 1号横穴墓鉄器出土状況



5. 遺構配置図 (1/150)